

## チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第6号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

このところ、暑くなってきて、寒がりの小生にとっては大変ありがたい日が続くようになりました。しかし、朝夕の冷え込みがけっこうあって(ちょうど、窪川みたいなものです)昼間は半袖でも、夜は長袖を上にも重ねないと寒いこともあります。まだまだ、本格的な夏はやってきてはいないようです。

仕事半分、遊び半分で、この国の北西にある港町タバルカという町まで行っていました。夏にはヨーロッパ観光客が訪れる地でもあるのですが、まだ、シーズンに入っていないようで、まばらに見かける程度でした。この町に来るヨーロッパからの観光客の殆どはチャーター機を使って直接この町に来るのですが、そのために、チュニジアでは町はずれに空港を(軍も使ってはいますが)準備しているのですから、観光に対してどれほど力を入れているのかを推測することができます。この国の中南部の方には、5kmとか10kmとか海岸線沿いにリゾート地域があちらこちら点在するのですが、ここは開発段階ということで、まだ1kmにも満たない位の規模でした。それでも4つ星、5つ星のホテルが立ち並んでいて、高級リゾート地という雰囲気をもも出してしまっていました。町中にはどこにでもあるようなチュニジアの町の風景でしたが、長期滞在者用のアパート(コンドミニアム)がいくつか建てられていて、建築中の建物も数多く見かけました。観光の波が押し寄せてきているようです。

前回、ひょっとしたら進水しているかも、と書いた船は未だ浮かんでなく部品待ちの状態、造船所に鎮座しています。この国の船の作り方が日本と違って、ボディーは造船所で作る、それに艀装するエンジンや操舵装置金属加工品(スクリュー等)は、発注者が準備して作業も手配する、という我々からすると変則的な方法で作られているのです。(漁船の場合)この国の多くの中小企業では、日給月給を採用しているため、この造船所で金物の取り付け等をしている作業員は、仕事が無いとき、よその作業現場で働いて、仕事が出来たときに戻ってきて仕事をしているものとばかり思っていたのですが、これが違っていたのです。ここでは完全に仕事の住み分けができていて、FRP作業と金物の作業は別の会社(または個人)が分業して1つの船を作っているのです。従って、FRP造船所で、いつボディーが仕上がるのかを発注者に見通しを連絡してから、発注者が次の作業に必要な物と人の手配をすることになるので、最終的に船がいつ進水するのかは、発注者が決めるのではなく、金物の作業者がどれくらいのペースで仕事を進めるのかによって決まってしまうのです。



左側がスキフボートと呼ばれる、巻き網船で使われる小型作業船。小型と言っても長さが7.5mもあります。右側は13.5m延縄船のブリッジです。電気屋である私の設計。製造中にオーナーの希望が次から次と変更になり、初期の設計と現在では、構造や形が違ってきています。



我々が「だめだし」した部分の一部です。斜めに線が入っているように見えるのが全て段差です。きちんと左右がつながって

いません。作業方法に問題があり、次からの必須改善項目です。

エンジンなどハイバリュー(高価格品)な部品を発注者に準備してもらって(現物支給してもらって)、作業全てを造船所が責任を持って行うようにすれば、製造日程がコントロールできる等色々メリットがあるために、方法を変えれば、ということも言ったことありますが、昔からのしきたりが厚い壁になっていて、そうそう簡単には変えることができない、というのが造船所のオーナーの話でした。

メス型から外された船のボディーを見た発注者は、「プレジャーボート。漁船ではないみたいだ。」との感想。メス型を作るためのオス型を作った時に船の形は、分かっていたはずですが、実際に船のボディーが出来た時に改めて、従来の船と大きく違った形をしているのを実感したようでした。

しかし、われわれ日本人チームからすると、出来栄が悪くて、とても胸を張ることはできない代物なのです。製造過程についてもアドバイスをあらかじめしているのですが、設計しなければならない部品があったり、他の船の計画や検討作業が有るために実際に作業を行う際、いつもそばにいて作業方法をチェックすることが出来なかったため、手を抜いた、この国のやり方で作られてしまったのです。楽をして形にするという悪い方法が作業員に引き継がれていて、少し手間がかかっても、いい品物にするという考えは今のところ残念ながら欠如しているのです。

こころあたりは、次回製造するときに、しっかりチェックを行うことが必要である、との我々側の反省事項でした。色々書き物にして造船所のオーナーに渡して、彼自身にフランス語からアラビア語に翻訳してもらうことも必要だと考えています。作業者は、殆どフランス語を話すことが出来ないのです。(私と同じ程度。多少彼らの方が語彙が多いくらい)アラビア語を話すことは出来ても、書くことは出来ないという人が多いので、オーナーがアラビア語を書くことが出来るのか確認をまず行わなければならないのですが。マグレブ(モロッコ、アルジェリア、チュニジア)では話し言葉をアラビア語(書く文字(単語)は全てコーランで使われている文字(単語)に置き換える必要があるとのこと)に置き換えることが非常に難しいと言われていて、公式文書など体裁が整った文章を作成しようとしても、きちんとした文章を書くことが、なかなかできないのが実情らしいのです。でも、作業手順書などは、「・・しなさい」とか、「・・してはならない」など、少しの説明文と多くの説明図で構成されるので、なんとかなるのではと思っているのです。どうにもならなければ、日本語を話すことができる我が家の大家さんに助力をお願いすることになるのですが、これはあくまでも最終手段なのです。(もちろん彼はアラビア語を書くことができます。)で、我々が「だめだし」した一部の例の写真を貼付します。この写真では分かりにくいのですが、船の左右で5mmくらい段差があるのです。これは船の強度に影響する悪い作業なのですが、設計よりも厚くFRPを積層しているので、段差部分を削って手直すことで、なんとかなるだろうという船体設計SVのコメントでした。日本なら、売り物にならないような、悪いできであっても、この国では形になっていれば、売買が成立してしまうのが一般的なのです。せつかくFRPで船を作るのに「軽くて強い船」ではなく「重くて弱い船」になる可能性が十分にあるのです。実際、今まで作られている船を見ると、「重くて弱い船」だと思われるものが全てで、FRP船のメリットがまったく理解されていないのです。漁船のオーナーに対するFRP船の特徴やメリットなどの啓蒙も必要ですが、日本チームが設計した船がいい結果を出すことが出来れば、彼らの考え方も変わっていくものと考えています。ここの人の多くは、自分の目で見なければ、理屈で分かっていたとしても自分自身を納得させることができないようです。

来月こそは、「試験運転しました。結果は良好」という報告ができればいいのですが、そこは「神のみぞ知る」なので、どうなりますやら。



隊員からの便り (2004/7/26到着)

## チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第7号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

やってきました、チュニジアの夏が。と、言っても、今年の方がよっぽど暑いのかも知れません。今のところ34、35度位が最高温度なのです。この人も「今年は暑くない」と言っているくらいですから、本来の暑さではないようです。乾燥地域であるために、日本のように肌にまとわりつく暑さではなく、また、日陰に入って風があった時には、涼しいと感じるくらいです。

アパートの大家さんも7月中旬から9月中旬までの長い夏休みに入りました。出身地の島(ケルケナ諸島)にある別荘に、一族みんなが集まるとのことでした。ちょうど日本のお盆休みに田舎(実家)に、みんなが集まるようなものでしょうか。

2月間もの間、何をして過ごすのか聞いたところ、気が向いたら魚を捕りに海に出てみんなが食べる分だけ捕ってくるし、本を読むこともあるし、その時その時の気分でなにをやるのかを決めるとのこと。しかし、なにもしない時間が一番多いとのこと。

なにもしない贅沢。日本ではそうそう、そのような贅沢はできないのかもしれませんがここでは、そんなに難しいことではないようです。

所用があってチュニスに行ってきたのですが、さすがに観光シーズン本番に入ったようで、あちらこちらで英語やスペイン語、ドイツ語などを、ひんぱんに耳にするようになりました。格好も男性なら半ズボンにTシャツ、女性ならノースリーブといった様相です。さすがに欧米人はどこであっても、自分のやり方を押し通すようで日本の観光案内書によく書かれている「イスラムの国では肌をださないように」などということとは、関係無いという感じです。

日本人の姿も増えてきましたが、若い人の姿が多くなったようです。学校が休みになりあちらこちらを回っているのでしょう。一人よりも二人、二人よりも三人、三人よりも四人という訳ではないのですが、それこそよく比喻されるように、そろそろ団体で歩いているのを目にします。団体さんで動いているから、町中ではよく目立ちます。ツアーで来ているのなら、ガイドさんの後について、そろそろ歩くのが普通ですが。

仕事先の作業員を招いて日本食をだしましたが、煮物、揚げ物であっても、最初にほんの少しだけ口にするだけで、食べようとしません。もちろん、豚肉なんかを使った料理はいっさい作ってはいませんが、どうも、よその国の食べ物は信用をしていないみたいです。外国に出かけたことのある人は、他の国の食べ物の経験もあるので、拒否反応は殆ど無いのですが、作業員の殆どは、首都であるチュニスには行ったことがあっても、南にある砂漠やジェルバ島というところには行ったことが無いということで、ましてや外国に行ったことがあるという作業員は皆無なのです。行ってみたいという話はするのですが、彼らの貰っている給料(1日15DTから20DT: 1DTは約90円)からすると、そうそう簡単には、ちょっとパリまでということにならないようです。

飛行機でパリ往復が240DT位なので、きちんと計画を立てて貯金をしていれば、そんなに難しい話ではないのですが、国外への現金の持ち出しが1000DTまでと決められているのも足かせのようです。

おみやげなんかは、物よりも食べ物の方を喜ぶお国柄ですから、外国に行った所で腹の足しにはならない、という考えがあるのかもしれませんが、そのところは深く彼らに聞いたことがないので、本当の所は定かではありませんが。

話が逸れてしまいましたが、食べ物の話にまた戻って。揚げ物の中で、唯一彼らが口にするのは「鳥の唐揚げ」。野菜の天ぷらや、魚介類のかき揚げは、そっぽをむかれてしまいます。鳥の唐揚げも、ここの調味料である「ハリッサ」をつけて食べていました。ツナ缶にオリーブオイル、そしてハリッサという、ここの定番の食べ物にバゲットを出すと、ばくばく食べてくれますが。そんなことで、以後彼らを招待するときには、いっさい日本食は作らず、ここの食べ物を出すことにしました。

昨日は、ここで売っているソーセージにオリーブの塩漬け、そしてツナ缶セットを準備しましたが、これでいいのとは思ってしまうのですが、彼らにとっては慣れ親しんだ食べ物なので、なんの問題もないようでした。

さて、日本式漁船の一号艇進水の日は、いつになったらやってくるのでしょうか。エンジンや金属加工品の取り付けが始まって、もう一月が経とうとしていますが、今のところ完成の目途が立っていません。この程度の仕事なら一週間で仕上げると思うような事でも、段取りが悪かったりして2週間経っても終わっていません。確かに青空天井(屋外)で仕事をしているので、暑くて効率が下がるのは理解ができるのですが、そこまで時間をかけて仕事をするのか、と思ってしまうくらい。ここいらあたりはお国柄なのかもしれませんが、期日を設定して仕事の契約をするということが殆どないことが原因の一要因であることは間違いがないようです。日本と違って日給月給なので、職人さんは気が向かなければ仕事に出てこないということが当たり前であることから、よほど大きな会社で無い限り工程管理をきちんとすることは無理な事のように思えます。船を係留するために使うビットと呼ばれる金物1つを付けるのに半日もかかっているのですから想像を絶する遅さです。(日本なら30分もあれば取り付けが完了するくらいの仕事なのですが。)



作業者は頭からつま先まで、FRP粉塵で真っ白になっています。作業者の健康上問題があり改善が必要だということで、防じんメガネ、防じんマスク、長袖作業着を準備させましたが、作業員は面倒くさがってなかなか保護具を着用しようとしません。夏は暑いからよいです。

この国の大学の偉い先生が「FRP粉塵は人体に無害である。」という見解を出したとのこと。素人が考えても有害であることは一目瞭然です。どういった研究結果により、この見解を出したのか論文を見てみたいものです。

日本では当然、法令により保護具の使用が定められているのですが。

そんなことで、職人さんが来なかったり、来てもスローペースでしか仕事が進まないという現状からすると、冬の漁期には100%間に合うでしょうが、8月中旬に船が浮かぶかどうかもう危ういところですよ。

仕事をしている造船所では、今までもFRPの漁船を造ってはいましたが、材料管理や工程管理はいっさい行われておらず、作業途中で大事な材料であるグラスファイバーや合成樹脂が無くなってしまふということが頻繁に発生していて今後の改善課題になっています。課題と言えば、船を載せる架台に使われているのは、ドラム缶。出荷前に一時的に置いてあるのならまだしも、漁船の製造の工程全てでドラム缶が使われているのです。合成樹脂が入っていたドラム缶がいくらでも有るのは有るのですが、缶は缶であって架台では無いのです。1艇だけ造るのなら費用がかかるのでドラム缶で代用ということが理解できますが、何10艇も同じ船を造っていて、未だに架台がないというのが日本人の感覚からすると不思議なところですが、彼らにとってみれば、ごくごく当たり前のことのようにです。

日本式のやり方が一番良くて、同じようにやらなければならない、などとは少しも思っていないのですが、作業安全上問題があったり、作業効率上がる方法がとられていなかったりした時には、アドバイスをするようにしています。

しかし、この国にはこの国のやり方もある訳ですから、全てを否定してしまつては前には進まないのです。いきなり小学生に大学入試の問題を解けといっても出来ないのが当たり前のように、ステップバイステップでなければ。今すぐに出来なくても10年後に、「あの日本人が言っていたことは、こんな簡単なことなんだ。」と思ってもらえるくらいのペースであったとしても、それで十分進展があるわけで今日明日に結果を出さなければならない必要も無いと思っています。ただし、今回SVが設計した船がいい船であるという結果が出なかった場合には、少々辛い立場に置かれてしまうことは間違いないでしょう。日本と違って試作艇を造って、結果をフィードバックして2号艇目に反映するということが難しい物の造りかたをしているので、一発勝負というところが辛いところです。

船の安全性については、今まで造られていた「いつ沈んでもおかしくない」というものに比べれば、格段に向上していることは間違いないので、オーナーや船長にまず船の安全性について意識の向上が広がれば、というところから徐々にということで啓蒙活動を進めています。

来月は仕事先が2週間ほど夏期休暇に入るために、またまた船の完成が遅れてしまいそうな状況です。アッラーの思し召しがあれば、それまでに進水式を迎えることができているでしょうが、はてさて如何相成りますやら。



隊員からの便り (2004/9/8到着)

## チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第8号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

8月後半、配属先の会社が2週間の夏休みに入ったために製造の方がSTOP。なんと言っても、そこいらあたりはお国柄なので、どうのこうのと言うことではないのですが、実際問題、昼日中は暑くて、仕事の効率が上がらないので、この夏休みと言うのは、理に適っているのかもしれませんが。

7月、8月は役所も勤務時間が夏時間になり、午後2時で全て終了してしまいます。役所には夏休みはありませんが、それぞれに、2週間から1か月間程、休暇を取りバカンスに出かけたりしています。

町中のレストランや商店でも、2週から3週間ほど、夏期休業をしているところもあったりして、買い物に行ってみたら、店が閉まっていたということを何回か経験しました。(買い手側からすれば、不都合極まりないのですが、致し方なしです。)

新聞の風刺絵に、「今日から勤務時間は冬時間。しかし、仕事をするのは夏時間」というのがあり、よく分かっているなあ、と変に感心しました。

せっかくの夏休み、休暇がメインで、仕事を少し、ということで、国の北西部にある「TABARKA(タバルカ)」という新興の観光地に行ってきました。

4星、5星のホテルには、欧米からの観光客がわんさかとやって来ていて、さすが観光収入が国の予算収入に占める割合が大きな国であるということを実感しました。市内のお土産屋さんや、外国人向けレストランなどは、もちろんツーリスト価格で物品や食事を提供しています。大体、地元価格の3-5倍位の値を付けています。

もちろん、現地人に間違えられる私が泊まるホテルは星無し、食事は地元の人が利用している食堂(レストランではありません。前の便りを見て頂ければ、違いを説明していますので、どう違うのか分かって頂けると思います。)。そんな訳でバッグパッカー並(それ以下かも)の費用で休暇を過ごすことができました。現地密着型の生活ができるのも、青年海外協力隊員を経験したからこそなのです。

新聞のコラムに次のような記事が掲載されていました。

「Je ne fais pas ce que j'aime, mais,  
j'aime ce que je fais.」(原文そのまま転載)

訳すと、「自分の好きなことはしないけれども、するということは好きだ。」と言ったところでしょうか。この言葉を言ったのは、小さな食料品店(雑貨も置いてある)の店主です。家の家業を継いでこの仕事をしているとのこと。

しかし、市街化開発の波に飲み込まれて廃業をすることになるのだそうです。(交通の便が良くなり、近くに大型店舗が出店したりすれば、小さなお店の経営が成り立たなくなるのは、いずれの国でも同じようなことのようにです。)

しかし、この店主、ただの小さな食料品店の店主ではないのです。なんと医者資格を持っているにもかかわらず、親の家業を継いで店主に納まっていたのです。

日本的な考えからすれば(私だけかもしれませんが)、なんで医者の仕事をしないのだらうと思ってしまうところなのですが、この言葉の中に、彼の物事に対する考え方が、ぎっしりと詰まっているのだらうな、と深く感慨をうけました。

ちなみに、今の日本人(若い人)に語ってもらったら、

「Je n'aime pas ce que je fais, mais,

je fais ce que j'aime.」

という言葉が聞けるのではないかと思います。訳は、原文と対比することで分かって頂けるとと思います。仏語がおわかりになる方なら、いとも簡単でしょう。(おわかりになれば、メールをお送り頂ければ答えをお教え致します。)

この国、失業対策もあって路上清掃員が多く雇用されています。彼らはあらかじめ決められた区域があるので、さぼって仕事をしなかったり、いい加減な仕事をする交代要員はいくらでもいるために、けっこうきちんと仕事をしています。それでも町中にはいつもゴミが散乱しています。さすがに首都の官庁街やちょっと離れた所にある大統領府の周辺はゴミを見ることはまずありませんが。バスで10分も走れば至る所にゴミが散乱していて、たまに大型家電製品などが不法投棄されていることもあったりします。ゴミを焼却処分せず埋め立て(実際は野積みの状態)しているため埋め立て地では、ゴミの自然発火でいつも煙が立っている状態です。この先もこの状態が続くのか、それとも改善の方策を取るのか、全てはアラー(イスラムの神)の思し召し次第ということになるのでしょうか。なんでもかんでも、ぽいぽい道に捨てるという、この国の国民性からすれば、簡単にゴミ問題が解決するとは、なかなか思えないのです。(大地に帰らない材料で物を作るようになってから、このような問題は、世界どの国でも同じような経験をしていることなのですが。)

政府はハイテクや高等教育(大学を含めて)に力を入れて(予算も1/3近く)いるのですが、それ以前の初等教育にも、もっと力を入れるべきではないのかと他の国のことながら、心配をしてみたりしています。

さて、本来の仕事ですが、日本式FRP漁船の第1号艇の進水が、近づいてきています。しかし、いつ、進水させるのか(することができるのか)は、未だ不明です。8割方作業が完了し、残り作業もそれほど手間がかかるものが残っていないので、9月中には、見事に海に浮く、ということになるかもしれません。

今回、夏期休暇中に少しばかりした仕事が何かというと、タバルカの零細漁民がどのような船を使っているのか、どのような方法で、どのような魚を捕っているのか、ということ調べてみました。

零細漁民と言っても、船外機を持つことができる人、そうでない人に、さらに分けることができます。また、この2つからさらに、網をもつことができる人、そうでない人、とさらに細分することができます。最低層の船外機無し、網無しの方は、鏡川の貸しボート(今もありましたっけ?)程の船で、手釣りということ

になります。地中海は日本の海と違って、大きな波があまり立たないので、穏やかな日に漁に出れば、それほどの危険性はないのですが、船(木造船)が古くて、木が水を吸ってしまって、沈没してしまうのではないかと感じてしまうくらいなのでわれわれの感覚からすれば、とてとても、と言ったところなのです。



零細漁民(船外機、網持ち)の船です。刺し網にかかった魚です。ホテルに売るそう、15DT/Kg程度。7、8Kg程ありそうですから、100DT超える値段になります。魚市場にだすよりも、ホテルに卸した方がお金になるそうです。(道路工事の作業員の日給は、8から10DT程度です。)

少し大きさに表現すれば、少しオールをこいでは、船の中に溜まった水を汲み出す、という有様なのです。取れる魚も、いい値で売ることができる魚が少ないために「労多くして功少なし」の状態なので、なかなか網を手に入れることが難しいようです。適切な表現ではありませんが、「貧乏人は、いつまでたっても貧乏人」ということが、そのまま当てはまっているような状況です。

この危なっかしい船を使っている人も、船外機と網を持っている人は、効率よく値のいい魚を捕ることができるため、前記の人からすれば、収入が多いのですが網や船外機購入の資金返済(利率が高いのです)が待っているために、それほど余裕が有るわけではない、とのことでした。(彼らは仏語が話せなかったので、チュニジア語—仏語の通訳を乗っていた船の船長さんや近くにいた人にしてもらいました。感謝)

政府は若者を対象に自立の資金援助をしているのですが、中高年者にはなんの援助もないために、生活を向上させることが難しい状況なのです。

で、なんで、このような調査をしているのかと言うと、この国の水産庁、工業省を巻き込んで、零細漁民対象の小型FRP船を普及するところができないのだろうか、ということのための下調べなのです。(公で補助金を出してもらおうとか、普及活動を行ってもらおうことが、我々FRP船チームのSVが立てた目標なのです。要請書には、いっさいこのようなことは記載されておらず、単にFRP船製造だけが記載されているのですが、佛造って魂入れず、ではということ、相談して決めました。)政府発表の数字等には、信憑性が無いために実情は自分で調べるしかないのです。

全ての漁港を見て回るのは時間的、費用的(自腹なので)に、しんどいところもあるのですが、すでに漁港としてめぼしい所は4割方調査が終わっているので、馬力をかけて年内に残りの漁港をと考えているのですが、秋から新造の船が何種も予定されているので、厳しいかもしれません。しかし、なんとか零細漁民向けのFRP船普及は実現させたいとおもっているところです。もう一つ、現在のところ漁業権の免許をなかなか新規に発行しないので(ほぼ0%に近いので更新が殆ど)、超えなければならないハードルは、そうそう低くはないのは分かっているのですが。

次の便りでは、日本式FRP漁船が浮きました、の写真を貼付することができると信じています。(アラ—の思し召しがあればですが)





隊員からの便り (2004/11/1到着)

## チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第9号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

日本は今年、台風の当たり年だったようで、県内に限らず日本国内、あちらこちらで、被災された方がおいでのようで、お見舞い申し上げます。また、新潟地方の方は地震で大変な被害が出ているようで、重ねてお見舞い申し上げます。

アッラーの神の思し召しがあったのか、第8号を日本に送り出した翌々日に、日本式FRP漁船の第1号が無事に進水しました。その後、試験航海したのですがチュニジア側配属先や船主、船長さんの意見を取り入れた箇所に不具合が発生してしまって、手直しの真っ最中です。と、言っても、船を使うことが出来ないわけではないので、部品を作っている間も、しっかり船を使っています。日本側設計チームは、問題が起こることを予想して、少し製造コストが上がるものの、日本方式を最初から提案していたのですから、「言わないこっちゃない」というところなのです。

やはり、ゆずるべきでない事柄は、相手がきちんと納得するまで、気長に説得(説明)する必要があることを、改めて痛感しました。彼等(チュニジア側)の持っている経験と、今回、日本チームが設計した船では、速度も装備品の機構も異なっていたことが、今回、改造が必要となった原因だと思われます。今回の失敗(と、言うよりも教訓)から、チュニジア側の信頼も上がりました。「日本式漁船は全てに関して、基本的には日本式でなければならない。」という考えを改めて持ったようです。ただし、日本みたいに、電話をすればすぐに必要な部品が全て手に入る、ということはないので、そこらあたりは柔軟に対応する必要がありますが。船の性能は、ほぼ計画通りであり、船体設計担当SVの株は大きく上がりました。この船には電装品が全くなかったので、船体設計担当SVの手伝い(図面の作成や作業指導等)をしていました。エンジン計器板の取り付けに際して、水がかからないように、防水カバーを取り付けるようにアドバイスしたのが、唯一、電気に関しての仕事でした。屋内用(防水でない)の電気器具(電灯やスイッチ等)を、防水対策もせず漁船に使用するのが、ここでは一般的なもので危険この上ないといったところなのですが、「今まで大きな事故が起きていないから、これでいいのだ。」というのが彼等の言い分なのです。

船舶用の電気部品が非常に手に入りにくい(または、手に入れることができない)という実情からすれば、屋内用電気器具を流用することは、致し方のないことなのです。しかし、ちょっとした工夫をすることで、完全防水とまではいなくても、簡易防水にすることが出来る物も中にはあるので、まずは、日本チーム設計の船で実績をつくってそれから、広めていきたいと思っています。

チュニジア側は、次から次へと新しい設計の船(それぞれ別の種類)が欲しいと言うようになり、船体設計担当SVは小生よりも半年以上早く着任していますから、残り任期からすると、そうそう、全ての要求を満たすことができそうもないような状況です。「鉄船の設計経験があっても、FRPの船はやったことがない」というのが、この国の船舶技術者ですから、船体設計担当SVの残り任期半年間で、どの程度まで技術移転ができるのか、難しいところはありますが、非常に優秀な技術者もいることから、なんとかしなければと、チームみんな(船舶機関担当SV1名を除いて)、馬力が掛かっているところです。

しかし、断食(ラマダン)が始まってしまい、10月半ばから1月間、仕事時間が半ドン(正しくは午前8時から午後2時まで)になるために、一気に効率が下がってしまうという、ジレンマもあります。泣く子と地頭には勝たれぬ、ではなく、ここではイスラム教には勝たれぬ、なのです。7, 8月の夏時間(8時から14時)が終わって、冬時間(8時から16時)になって仕事のペースが上がり始めたときに、またまた、半ドンに後戻りですから、どうしようもありません。

外国人だからと言って、堂々と町中で昼日中に、飲食物を口にすることは、憚られる事であり、われわれにしても少々辛いところはあります。この期間食堂やレストランは昼間営業をしていないので、食事は自宅に帰ってからということになります。設計室(日本人しかいない)でこっそりと水等を口にすることは、こちらの人も大目に見ていてくれることなので、脱水症状になることは避けることができます。乾燥している所ですから、日中に屋外で半日以上作業するとなると、水の補給無しでは、昼過ぎに体が危険な状態になってしまうは、ごくごく当然のことなのです。(未だに日中の最高気温が30度を下回ることは殆ど無いのですから。)

さすがに屋外で作業をしてる人達(他の造船所の作業員を含めて港で働いている人)が水の補給をしているのを目にしましたから、この国の人にとっても、昼日中、水分補給無しで作業を続けことの危なさを、きちんと分かっているようです。

一部の喫茶店では、黒色のカーテンで窓を全て覆ってしまって、外から中が見えないようにしてから、薄明かりを点けて日中に営業しているところも。しかし、このような所は例外中の例外です。外国人向けの営業許可を取っているレストランの中には日中に開店しているところもありますが、外国人向けのレストランであったとしても、殆どが夜だけの営業になっています。(外国人相手のレストランでは、たとえラマダン期間中であっても夜になれば、いつものように酒類の提供が行われています。地元住民が相手のレストランでは、ラマダン期間中に、アルコールが提供されることはありません。)ですから、普段なら浴びるくらいに飲んでいる人達も、今は、おとなしくしています。

10月24日に大統領選挙が行われたのですが、現在の大統領(ベンアリ)は自分が再選されるように、連続して大統領として就任することができる期間を定めてある法律を変えてしまったのですから、ごくごく当然のように再選ということに。隣国のアルジェリアなんかも同様なのですが、一度掴んだ権力を、そうそう簡単に手放すということを決してしないのが、やはりアラブ(イスラム)なんだと感じました。一応、選挙をきちんとやりました、とうことを世界的に示しておかないと、国際的に「独裁者」ということになるので、そこいらはきちんと、表向き配慮をしています。

本当の民主主義の国であるのなら、人が集まる場所(レストラン、ホテル、商店等)や、あちらこちらの路上に、自分(大統領)の顔写真を掲示させるということは、絶対にしないし、国民もそれを認めるということは決してしないのが当然なことなのですがこの国では、どこに行っても大統領の顔写真等が掲示されています。

今回の大統領選挙に、対抗馬と呼ばれる人が出てはいるのですが、現職大統領は、国内のあちらこちらで、自分が行った(行っている)公共事業等々を、公費を使って宣伝しているので、とてもとても宣伝に関して対抗することができません。

ちなみに、フランスのテレビで選挙活動の映像が流れていましたが、現職大統領だけで対立候補の映像は、一度も流れることはありませんでした。外国の報道機関でさえこのありさまですから、国内については言うに及ばないことが分かります。国内には日本と同じように、立候補者の顔写真を掲示する告示板が設置されていたとのことなのですが、私が住んでいる市(人口、約60万人)で、選挙期間中に一度も見たことがありませんでした。用事があって、市の中心部や、あちらこちら公共機関の建物などに行ったりしていたのですが。選挙(投票)の次の日、町外れの高校の壁に設置されていたのを(街路樹が邪魔でよく見えない)、見たのが最初で最後でした。

また、公共の場で現職大統領を批判すると、その場で逮捕され、即刻監獄入りということになるために、外(バーや喫茶店等々)で批判をすることは、チュニジア国内ではありえないことなのです。(表向き、政治団体の活動や発言の自由を認めていることになってはいますが、実際は決して認めていません。取締まりの対象になっています。)こんなことが実情(実際)であっても、国際的には、公平な選挙を行って再選されたということになっているのです。国内に現大統領に対して批判を持っている人は結構多いらしいのですが、監獄入りになるとか、仕事がなくなるとかのペナルティが科せられしめという現実が立ちはだかっているのです。表向きおとなしくしているしか仕方がないということらしい。以前にも書いたと思いますが、情報統制、情報操作が行われている国なので、一般国民にとって「自由な発言」は存在しないのです。

それでも、国際的に見ると「民主主義の国」ということになるらしい、これが不思議。実際に住んでみると、イスラム教の生活習慣上の制約よりも、政府が行っている制約が足かせになっていて、人々が自由に生活することができていないことが分かる事も。(表向きは、制約が無いことになってはいますが、暗黙の制約というのがあります。)今回の選挙で、あと5年間は現職大統領が続投ということになったわけである。次の選挙の前に、また法律を変えて、自分が大統領に就任することができるようにするのであろう、と推測することができます。いつになったら、本当の民主主義の国になるのでしょうか。それこそ、アラームの思召し次第なのかもしれません。

港の造船所(仕事先)では、断食前に連れてこられた、羊が順調に太っています。紐で繋いで運動ができないようにしているので、脂がついて良い感じになりそうです。断食が始まって2週間が経過したので、残り2週間。11月の13日か14日が断食の最終日。その日までの、はかない命なのです。はかない命と言えば、イラクではまたまた日本人の人質(?)が。外務省から、渡航しないよう強い勧告があったのにも関わらずそれを無視した結果ですから、「自分のケツは自分で拭け」と言ってやりたい。もはや、言ったところで聞いてもらうこともできない状況になってしまいました。

日本国内では相次ぐ台風や、新潟地震の対応で大変な状況なので、まず国内の問題が一段落して、余裕ができてから、ということに必然的になるのでしょうか、それが当然の事だと考えます。



向かって左側:チュニジアのFRP船(木の船をそのままFRPにしただけ)  
向かって右側:日本式FRP船(長さほぼ同じでも、一回り大きい)

一人が大事か、万人が大事かという問いに、即刻、万人という答えがでるのは、ごく当たり前のことです。去年の断食には、駐イラク大使館員の方が不幸にも標的にされて命を落とされています。彼の家族には大変申し訳ないですが彼が今年のSCAPE・GOATになってしまったことについては、当然の流れなのです。フランスのテレビニュースで今回の人質に関して日本国内で行われた抗議行動の映像が少しだけ流れていましたが、「人質は、煮るなり、焼くなり、好きにしてください。」という言葉が見られました。皮肉を込めての表現だとは思いますが、日本語を読むことができる外国の人が、その部分だけみれば、日本人は、なんということを考える人種だ、ということになるでしょう。抗議行動をするのは、それをやる人のかってですから、好きなようにやってもらっても、なんら問題はないのですが、横断幕や垂れ幕などの文書表現については、日本人だけが見るわけではないことを、きちんと理解した上で、行ってもらいたいものです。テロリスト達がこの映像を見て、「では、好きなようにする。」と決めたとは、とても思えないのですが、タイミング的にはぴったりでした。



## チュニジア便り チュニジアンブルーの空の下(第10号)

SV 船舶電気 スファックス市勤務 立花邦彦

早いもので、日本を出てから1年が経過しました。「光陰矢のごとし」と言いますが、当に時間の経つのは早いものです。この一年間を振り返ってみると、いったいどれくらいこの国の人達のために貢献する活動が出来たのか、遺憾ながら疑問のあるところです。確かに、スキップボートと呼ばれる船が進水し、高い評価を得ていますが、この船に関して本職での参加は、殆ど「なし」に近い状態でしたので、なんともしようと言ったところなのです。

派遣前の研修では、「最初の1年目は様子見、2年目にがんばって」などと言葉にする方がいますが、2年という少ない時間の中で、それなりの成果を上げようと思うと、最初からトップギアで走らなければ、難しいところがあります。自分なりに結構、最初から飛ばしていたつもりなのですが、「いったい、どれくらいの成果が？」と聞かれたときに、胸を張って「これこれ」と言うことができないのが実情です。電気・電子機器の艤装をするためにはまず対象となる船が、ある程度出来ていなければならぬのですが、対象となる船がなかなか艤装する段階にまで到達しないので、後ろに後ろにスケジュールがずれてしまっています。

グループ派遣なのでグループとしての目標が有るわけですから、個人の目標が達成できたとしても、グループ全体としての目標が達成することができなければ、グループ派遣の意味が無くなってしまいます。ですから、グループ目標達成のために、今の状況で何ができるのか、ということを考えて活動をするように心がけてきました。業務の70%近くは同僚SVの応援ということになります。本職の電気艤装についての仏語版作業手順書等の作成等などが残りの30%の時間という割り振りです。前任SVが来年3月末で帰国されるので、本職に関する色々な事項は、それ以降に十分に時間を取ることができる予定なのです。4月以降の8ヶ月間は1人で本職の続きと、前任SVの引き継ぎ業務を行うこととなります。

零細漁民向けの小型漁船をなんとか普及させることができないか、ということで色々調査などを行って来ましたが、現在のこの国の内情や、実行するための資金調達(FRP船を作るための型を製作する費用)、管理運営が困難である、という結論に達し、今回は残念ながら見送ることになりました。今後につなげるための第一段階として、セミナーを開催して、まずは漁民等の反応を見てみる、という所まではJICA事務所を動かすことができたので、完全に「何も無し」になった訳ではありませんが、専門家か普及担当のSVが派遣されるようになればいいのですが、全ては2月のセミナーの結果次第ということになります。「零細漁民にとってFRP船は、とても高い買い物である」訳ですから、日本のように、補助金や金利無しの貸付金等が充実していない、この国の実情からすると、とても難しい障壁が立ちはだかっているのが現実です。(今後、どのように政策が変わるのか不明なので、先のことは何とも言うことができませんが)



この一年、船舶設計担当SVや船舶機関担当SVの応援をしてきましたが、一人でこなすことができない位の仕事があって、その応援をすることについては、喜んで雑務であってもなんでも引き受けました。しかし、自分の遊ぶのが忙しく、仕事に対する取り組みが熱心でないSV(船舶機関担当、以前の号を読んでいただければ、どのような方なのか、だいたい理解していただけたと思います。)の応援は他グループ員同様、「彼の業務を代行しなければ穴が開く」ということで、「致し方なし」という思いがありました。



今は最初から「居なかった」と考えるようにして、他SVが各自出来る範囲で「穴埋め」に当たることにしています。これは、前任SVが帰国するまで続くこととなります。小生が機関について知っている事柄については、この1年の間に、ほぼ出し尽くしたので、新しく何かが出てくれば、日本に問い合わせしなければならないこととなります。

しかし船外機に関しては、日本の某Y社の現地(チュニジア)代理店の技術者がかなりの知識と経験を持っているので、なにも聞かれることはないと思います。事実、今までに相当数の船外機の取り付けや修理を行っていて、問題なくやってこれていますから。

船内設置用のエンジンについては、中国製や韓国製が大半なので少しばかりやっかいです。コストダウンのためには、高価格品品の値段をどうやって低く抑えるのかが大事になってきますから、エンジンがこれらの国からの輸入品であることは、致し方ない事なのではあります。英語が苦手な小生には、少しばかり重荷になりそうです。



さて、来年度春の派遣者から住居手当や現地生活費が減額されるということが決まってJICA本部では査定を行っているようです。来年度予算の要求からすれば、これを書いている今現在には、すでに査定が全て終了して、新しい金額が決まっていることでしょう。

SVは専門家事業から分離したことから下級専門家を基準にして、全ての処遇が決められていましたから、隊員の処遇からすれば「恵まれている」ことは事実です。必ず成果を上げなければならない専門家とは違ってボランティア事業であるから、それに見合うだけの報酬を、というのが本部の考え方のようです。今更なのですが、やらないと。

今までの累計で2,500名を超えるSVが派遣されているのですが、中には「定年後の暇つぶし、小遣い稼ぎ」とか、「外国暮らしができる」とかが本音であり、目的であるボランティア活動が、二の次という方がおおいようです。悲しいかな、これが今の現実なのです。税金を使って、「優雅な外国暮らし」を満喫されているSVも居ると聞いています。これらの悲しむべき事実は別にしても、手当の減額は正当であると思います。某国のSVは「けしからん」という意見書を本部に出したとの事ですが。隊員の手当に近い金額に家族手当を加えた額にまで減額されると、まず、普通の人達(隊員経験者以外)なら、任地で生活することが出来ないと思います。

任国での生活を日本並みの生活水準でなければ、と考えている人達が多いことでしょうから。SVは隊員と違って、役所の局長、部長級の人や、大学の学部長クラスの人がカウンターパートであったりすることもありますから、つき合いをしなければならぬSVは、色々大変であろうとは思いますが。しかし、現行の手当はボランティア事業としては高額であることに間違いはありません。新しい手当等は、シニア隊員の手当、処遇を基本にしているように聞いています。そこまで減額した方が本当にやる気のあるSVが応募するようになると思います。処遇が良いために、だめなSVが派遣されている、ということもできるかもしれません。(ごくごく一部のSVではありますが。)

実際に現地での生活が成り立たない位に手当が減額されたならば、そうそうきれい事ばかりも言ってはいただけませんが、いくらなんでも、そこまでは減額しないでしよう。隊員の生活手当の基準額の根拠が任国の公務員給与である、と聞いたことがあります。シニア隊員の手当は、その倍額+ $\alpha$ 程度だったとの記憶があります。シニア隊員は家族同伴が認められていて、その手当で生活できているのですから、SVでも同額で生活ができないことは無いと思います。国によって大きな差があり、実際の生活費と支給される生活費の差が、ものすごく大きくて、「使い切れない」という国もあれば「やりくりしないと」という国があることは、隊員の手当にしても同様のようです。(これは、シニア隊員の手当の話であって、現状のSVの現地生活費は高額なので、どの国であっても十分に足りています。足りないなんて言うのがおかしい位の額です)

この国の住居手当にしても、首都に住んでいる人達の多くは、どちらかと言うと高級住宅街なので、「少ない」などと言う人がいますが、庶民の住むアパートなら十分にお釣りの来るくらいの額なのです。家具付きが一般的ではないので、家具や什器備品の借用費用が追加で必要になるために、家賃が高くなるのは仕方ないことです。しかし、「いいところに住みたい」という高望みをしなければ、減額されたところで、十分に手当内で賄うことが出来るはずで

また、現在、2年派遣のSVは1度、日本への帰国を公費ですることができる事になっています。確かに高齢者が多いので、日本の病院で年に一度はきちんとした健康診断を受けたことに超したことはありません。しかし、健康管理旅行費が支給される基準国は、先進国であり医療施設も整っている国々であることから、なにがなんでも日本に帰国して、という必要も無いと思います。出発前の健康診断は「問題なし」ということになっているのですし、年齢の関係から何時急変するということも考えられないことはないのですが、それは隊員であっても同じことです。また、隊員は任国の病院で健康診断を実施しているので、最低限の健康診断なら任国内でも可能なのです。

一年目40日、二年目55日の任国外旅行取得可能日数を隊員並にするという事も決まっているようです。二年間で95日。総計3ヶ月間もの間、任国を離れることが可能な訳ですが、この日数をほぼ100%近く消化しているSVも数多いと聞きます。

確かに、大学とかの配属だと休みばかりで実質の勤務日数は少ないですから、消化するには困ることがないでしょうけれども、国によって違っているようですが、11ヶ月間働いて1ヶ月間休暇としている国が多いのではないのでしょうか。これと比べても、現行の日数は多い、ということが出来ます。隊員からすれば、SVも同じボランティアなのに、なんでSVは95日間も、という意見が出て当然です。(隊員から、そのような意見が出たのかどうかは、いっさい知りません。)

確かに年を重ねている方々ですから、それなりに敬意を払わなければなりません  
が、「年を取っているから、我々には多くの日数が与えられることが当然である。」と  
いう意見(考え)には反対です。そんな考えを持っている年寄り連中(表現が適切で  
ないのはご容赦ください)が、今の日本社会をダメにってしまった張本人達であるの  
ではないのでしょうか。(何回も書きましたが小生、右とか左とかではありません)い  
ずれにせよ今回の改正で、本当に熱意を持った人達だけが応募するようになれば  
しめたもので、SVの質(技量では無く、人間性)が向上することが、多いに期待出来  
るのではないのでしょうか。(技量は専門家に任せればいいこと)隊員の時の手当改  
定時にはアンケートがあったのに、今回のSVの手当改定に関して何も行われな  
かったのは、やはり、固くなった頭の人達からの意見を聞きたくないというJICA本部の  
考えなのではないのでしょうか。小生が改定の担当者だとしても、「聞く耳は持たない」でし  
ょうけれども。

それでは、良いお年を。(チュニジアでは使うことがない言葉です)